テロの季節

サウジでは、四月に入ると治安部隊とテロリスト・沙漠のさそりとの衝突が一層激しさを増した。

沙漠のさそりは、計画通り、四月末、そして五月には、厳重な警戒網を出し抜いて、原油価格を更に押し上げる過激なテロ事件を首都リヤド、紅海に面した工業都市ヤンブー、東部油田地帯の要、アルコバールで相次いで引き起こすことに成功する。

正にテロの季節の到来だった。

慎太郎とスルタンが頻繁に会うようになった四月上旬には、サウジ治安当局とテロの間の銃撃戦が何回かあった。

四月五日には、リヤド東部地区で治安部隊が不審な車を追跡して、乗っていたテロリスト一人を射殺、一人に重傷を負わせた。四月一二日には、同じくリヤド東部地区でテロリス

ト一人を射殺した。この時には治安部隊にも一人死者が出てしまった。

そして、翌一三日には、リヤドとカシームを繋ぐ道路上で、不審車両に乗ったテロリストが機関銃で警官四人を殺害した。この一三日の銃撃戦では、警察側は不審車両の拘束に成功している。テロリストは合計三台の車を使って自爆テロを計画していたようで、二台の車には大量の爆発物、一台の車には大量の武器が積み込まれていた。

五日後の一八日には、今年の二月一四日に七〇〇万リヤルの報賞金を付けて探していた、爆発物を搭載したＧＭサバーバンがリヤド南部で発見された。

また、同日には、治安部隊が一三日の警察官殺害に関係した八人のテロリストを拘束することに成功し三台の爆弾を積んだ車を押収した。それぞれの車には一トンを超える爆発物が積載されていた。そして、治安部隊は、一九日にも、さらに二台の車両を押収した。

このようにサウジ政府は、テロリストの自爆テロ計画を事

前に阻止したかに見え、慎太郎も押収されたトラックの数の多さには懸念を持ったものの、概ね思った通りの展開に安堵していた。

そんな中の、四月二一日の昼のことだった。

突然、三友商事リヤド支店のビルの窓ガラスがビリビリと音を立てて振動した。

慎太郎は、直ぐに警備員のハリドに電話を入れたが、ハリドも何が起こったか分からないという。ハリドの前のドアも激しく振動したと言っていた。事務所内でこのように身の危険を感じたのは、赴任以来、始めてのことだった。

慎太郎は、直ぐに、デスクと応接セットをドアの内側に置きドアが開かないようにした。事務所に対する攻撃があったとは思えないが、念には念を入れた方が良いと思ったからだった。しかし、四階にある彼の部屋の窓から、下を見てみたが大きな動きは見られ無かった。パトカーのサイレンは、いつものことだったが、今度は、何台ものパトカーが内務省の

方向に走って行くのが見えた。続いて、消防車、救急車がサイレンを鳴らして走って行った。たちまち、通りは、車の流れが悪くなった。

慎太郎は極度に緊張していた。額には脂汗が流れた。

一体何が起こったのだ。

すると慎太郎の携帯電話が鳴った。慎太郎が携帯を耳にあてるとオスマの声がした。

「ミスター・イケナミ、内務省の交通警察ビルが自爆テロに襲われたようです。ＢＢＣでも放送しているようですから、テレビのスイッチを入れて見て下さい」

「有難うオスマ」

と言って、慎太郎はテレビのスイッチを入れＢＢＣにチャンネルを合わせた。

そこには、静止画像だったが、丁度生生しい事故現場の様子が映し出されていた。

交通警察ビルの窓ガラスは全て割れ、幾つかの窓は破壊されていた。この映像から車はチェックポイントで爆発したも

のと思われた。建物の脇であれば、恐らく交通警察ビルは半壊となっていたことだろう。その分、周囲のビルに被害をもたらした。いつもながら、ＢＢＣの報道は早い。

その後の情報によれば、付近のマンションの窓ガラスも皆粉々に割れ周囲に飛散した。付近の住民は慌てて表に飛び出したが、警察に自宅に戻るよう促されたとのことだった。

こうして、テロリストは、治安の総本山である内務省の交通警察ビルに対する自爆テロに成功した。このテロ事件でテロリスト二人が爆死した。サウジ側には治安関係者二人を含む六人の死者、それに一四八人に及ぶ負傷者が出た。

交通警察ビルは、内務省本部のビルからはかなり離れてはいたが、リヤド中心部にあり、市民の不安は急速に高まっていった。

政府のビル、一流ホテル、コンパウンド、ショッピングセンター、銀行、大使館など市内の主要施設の警戒はより厳し

くなった。ホテルによっては、八〇〇万円以上もする爆弾探知機を導入したり、警備員、治安担当者の数を増加したりした。慎太郎の住んでいるファイサリア・レジデンスの治安体制もより厳格となった。コンパウンドでは、警備員、治安担当者の巡回頻度を高めた。チェックポイントの位置を建物からより離したところも出てきた。

治安の中枢を攻撃されたサウジ政府の威信は著しく傷ついた。

サード皇太子、トルキ航空国防相、ナイフ内相、サウド外相は、テロ攻撃を激しく非難しテロの一掃を宣言した。

ブッシュ米大統領を始めとする西側諸国の首相、外相からも、テロを非難しテロと対決するとの姿勢が表明された。

サウジ治安当局は、各地でより厳しい捜索を開始した。

翌二二日の夜には、ジェッダで治安部隊とテロリストの間で激しい銃撃戦があった。

治安部隊がテロリスト六人の乗った車をジェッダ北東部で発見し、これを追跡して、テロリストが逃げ込んだメッカ・ハイウェイ近くのウム・アルクラ通りに面したビルを取り囲み、テロリストと交戦したのだ。

警察は、ビルの周囲一〇〇メートルを封鎖し、テロ対策特殊部隊の到着を待った。一時間後に特殊部隊が到着し四〇分間、銃撃戦が行なわれた。この銃撃戦で四人のテロリストが射殺された。

同日、ブライダでもテロリストとの交戦があり、治安部隊から二人の重傷者が出た。治安部隊は、この捜索で弾薬一万発を押収した。

さらに、リヤド東部では二・八トンの爆発物を搭載した車両を二つ押収した。また、リヤド北東部のオイヤイナを治安

部隊が急襲しテロリストを捜索した。

メッカでも治安部隊は二軒の隠れ家から、弾丸一〇〇〇発を入れた箱を五つ、弾丸七五〇発を入れた箱を二つ発見した。

さらに、二三日には、治安部隊が再びジェッダで二人のテロリストを射殺した。

原油価格は、三月十七日にイラク戦争直前の高値を更新した後、落ち着きを取り戻し、四月五日には三四ドル強まで低下していたのだが、その後、このようなサウジの治安悪化、イラク情勢の悪化などにより、ジリジリと上昇を始めていた。

イラクでは、イラク戦争終結から一年以上経過していたが、相変わらず武装勢力の抵抗が続いていた。

加えて、四月五日にシーア強硬派のサドル師が徹底抗戦を叫んでから、イラク各地でイラク政府軍・駐留軍とサドル系民兵組織マハディ軍との間で戦闘が続いた。フセイン前大統領の出身地ファルージャ、シーア派の本拠地ナジャフにおける戦闘が特に激しかった。

これらの混乱を受け、原油価格は四月下旬には三七ドル台となり、三月十七日の高値三八・一八ドルを更新する勢いになった。また、悪いことは重なるもので米国ではガソリン在庫の低水準が続いていた。

サウジ政府のサウジ全土に及ぶ懸命な捜査が行われる中、今度は、紅海に面した工業都市ヤンブーで、まるで捜査を嘲(あざけ)るように、おぞましい事件が発生した。

五月一日土曜日の早朝のことだった。

四人のテロリストが米国のエンジニアリング会社・ラミレス社を襲い、同社の社員五人(米国人二人、イギリス人二人、オーストラリア人一人)と国家警備隊員一人を射殺した上、犯行に使用したトヨタ・ランドクルーザーに米国人の死体を縛り付けて約三キロメートルも引き吊り回した。若いテロリストは、車を運転しながら銃をかざし空中に向かって何度も

発砲した。

テロリスト達は、口々に、

「アラーフ・アフバル(アラーは偉大なり)」

「ライラハ・イララ・モハンマド・ラスルーラ(アラー以外に神は無し。モハメッドは最後の預言者)」

と叫んでいた。

テロリストの内、三人は石油化学会社の従業員で自分の身分証明書を使用して中に入り残る一人を非常口から導きいれた。そして、中で沿岸警備隊の制服を着用し犯行に及ぶという巧妙な手口だった。

犯人達は、死体を置き去りにして逃走しようとしたが、一〇キロメートルほど逃げたところで、治安部隊と衝突し二人はそこで射殺された。残る二人は、沿岸警備隊のジープを盗み逃走しようとしたが、治安部隊に発見され銃撃戦となり結局二人とも射殺された。この事件では、他に警察官を中心として一九人の負傷者が出た。また、治安部隊からも二名の死者が出た。

慎太郎は、このニュースを聞いた時、テロリストの用意周到さ、そしてテロリスト予備軍の裾野の広さに改めて驚かされた。厳重な警備網をかいくぐっての犯行は脅威だった。いかにタイトなセキュリティを敷いても、内部からの同調者がいたらどうしようもない。

ファイサリア・レジデンスの受付やその他の従業員がテロリストと内通していることも皆無とは言えないのではないかと考えると空寒いものがあった。

慎太郎は、スルタンや林のお蔭もあり、ようやく、本社の直接の上司である石渡専務をリヤドに呼ぶ環境を整えてきたところだったが、このヤンブー石油企業襲撃事件の発生は、慎太郎に再考を迫った。

なんとか石油大臣と石渡を会わせる段取りが出来そうだったのに、これでは石渡を呼ぶことは出来ないと慎太郎は地団太を踏んだ。

ところが、慎太郎が、週明けに事情を詳細に報告し、石渡

のサウジ招聘を断念する意向を述べたところ、意外にも、石渡は是非サウジの招聘に応えたいということだった。

石渡は、慎太郎のリヤドでの努力、苦労がようやく実ろうとしているのに、行かないわけにはいかないとまで言ってくれた。

慎太郎は、その気持ちが嬉しかった。

日本大使館からはこのような時期にリヤドに来ることを極力控えるよう警告が出されてはいたが、慎太郎には林という強い見方が居たので助かった。

こちらの方は難なくパスした。

慎太郎は、六月中旬に石渡を呼ぶ方向で調整に入った。

そうなると、リヤド支店も全店を上げて協力体制を敷いてくれた。やはり、東京本社から重役が来るというのは大変なことだった。しかも、石渡は時期社長の最右翼との噂があり、佐々木支店長も気が気ではなかった。

原油価格は、ヤンブー事件を受け、五月三日には三八・二一ドルとなり、イラク戦争時の高値を更新した三月十七日の三八・一八ドルをあっさりと超えてしまった。

更に、五月一二日には四〇・七七ドルとなり、湾岸戦争時の高値四〇・四二ドルをも更新して史上最高値を記録した。

そして、その後も上昇を続け、十七日には四一・五五ドルとなった。

原油価格が上昇している時には、いつもイブラヒムは上機嫌だった。他方、植木は浮かぬ顔をしていた。

植木が浮かぬ顔をしていたのは、もともと植木が原油価格は低廉であるべきだという持論を持っていたからだが、それだけではなかった。

植木の勤めている国際石油・ガスフォーラム事務局が二年に一回開催されるエネルギー関係の閣僚級会合である国際石油・ガスフォーラムの事務方であり、二〇〇四年五月二二日から二四日までオランダのアムステルダムで開催される予定の第九回国際石油・ガスフォーラムに向けて、消費国の

閣僚を中心として徐々に高原油価格に対する危惧が高まって来ていたからだ。

慎太郎は、三人で会って石油談義をする時に、このイブラヒムと植木の高価格に対する全く対照的な態度をいつも興味深く見ていた。

「シンタロウ、終に原油価格は史上最高値を更新したね。なんだか、ピキンズの予言した通りになって来た。五〇ドルも、もうすぐそこのようだ」

イブラヒムはいつもの楽しそうな口調でしゃべった。慎太郎は、さすがに、一消費者としてその言い方が気に障ってイブラヒムに言った。

「イブラヒム、君は原油価格が上昇していると本当に楽しそうだね。しかし、四〇ドルを超えると大変だよ。この水準が長く続くようだと、世界経済にも赤信号が灯るんじゃないかな」

この慎太郎の発言を受けて、植木は、待ってましたとばかりに、いつもの通り滔々と喋り始めた。

「そうです。誠に困った状況です。ここのところ、ヤンブーの襲撃事件などが、かなり石油先物市場に影響を与えているのではないかと思われます。市場はますます需給などのファンダメンタルズから乖離して、ジオポリティックスの影響を強く受け、プレミアムが増加しています。異常さが嵩じていると言えるのではないかと思います。まあ、サウジで何かが起きれば大変なことになるのは言うまでもありませんし、テロリストも公然とサウジの石油施設を攻撃すると言っているのですから、懸念は止むを得ない面があります。でも、サウジからの石油輸出が停止するような事態は世界的にも脅威です。まさしく緊急時に相当するわけですから、それこそ、ＩＥＡ(国際エネルギー機関)による対応が必要になると思います。これまで緊急時の石油融通システムは発動されたことはありませんでした。伝家の宝刀があるわけですから、市場で懸念しても仕方が無いことと思うのですが・・・。そうなったら、どう対応するかを前もって考えておけば良いことで既にそれは考えられている筈です。それをむやみやたらに心配しているのはおかしいと思います。市場では、現在の

需給のみを捉えれば良いと思うのですが」

植木は、需給などのファンダメンタルズ(基礎的諸条件)に何の問題も無いのにジオポリティックスなどの要因で原油価格が上昇してしまっていると考えていた。

そこでイブラヒムが植木に質問した。

「ミスターウエキは、いつも理路整然と説明してくれるので助かります。ですが、現在の石油需給というのは、どこまで正確に把握出来ているんでしょうか。米国の石油需給は、結構早く分かるけど世界全体となると、どうでしょう」

イブラヒムは日頃取引をしている際に感じていた疑問を率直にぶつけてみただけだったが、この質問は需給の専門家である植木が悩んでいた問題点の一つだった。

「これは痛いところを突かれました。たまたま現在はジオポリティックスが最大の問題になっているのですが、国際石油需給統計の精度をどのように高めて行くかは実は大問題なのです。今のところ、イブラヒムさんが言った米国、それに、日本も石油需給動向について週報を発表しています。しかし、その他の国々については月報も無いところもあり、大変苦労

しています。国際石油・ガスフォーラム事務局では、ＩＥＡ、ＯＰＥＣ、国連など六つの国際機関に協力してもらって、正確な石油需給統計の構築に挑んでいるところなのです。これは、二〇〇〇年にこのリヤドで開催された第七回国際石油・ガスフォーラムの時に、サード皇太子、それに出席していた主要国のエネルギー閣僚から要請されて始まったものです。市場の透明性を向上させる方策の一つで、誤解を少なくしようという試みです。ただ、なかなか、進まないところが困ったところなのです・・・。先ほどの六つの国際機関が、それぞれの加盟国から得た前月の需給データを国際石油・ガスフォーラム事務局に二〇日過ぎに送って、事務局がそれをまとめるだけのことなのですが、データの提出が完全ではないのです。いわば虫食い状態なんです」

石油需給統計を長年眺めてきて、現在も最前線でそれを見ている植木はイブラヒムにそう説明した。

慎太郎は、初めてその話を聞いて、

「市場の透明性を高めるために正確な石油需給統計を整備するというのは大変結構なことですがそれを実現するのは

至難の技でもありますね。皆が揃って提出してもらえるかどうかという問題の他に、統計誤差の問題もあるんじゃないでしょうか。世界の石油需要が一日当り約八〇〇〇万バレルとすると、統計誤差五％は四〇〇万バレルになってしまいます。これは、ＯＰＥＣの増減産量などを、その中にスッポリと収めてしまう規模ですから・・・」

と植木に語りかけた。

「そうなんですよ。従って、統計誤差が五％では駄目なのです。確かに、世界統計を考えた場合には、その程度の誤差は止むを得ないのかもしれませんが、なんとか一％程度にまで精度を高めたいと思って進めています。それに、ご存知の通り、統計は速報ベースと確報ベースでは修正が入るものです。ひどい時には何年も経ってから見直すこともあります。ただ、世界全体で、透明性を高めるための取組が是非とも必要であるとの認識は高まってきています」

植木は、そう応えながら、問題点が山積みであることは分かっていたので、少しでも、整備のスピードを上げなければならないと思っていた。

「ミスターウエキ、先物を取り扱う人は、米国の週報は欠かさず見ています。水曜日には、その前の週末、金曜日のデータが公表されるわけですから、これは市場に大きな影響を与えています。米国のエネルギー情報局の統計は、インターネットで無料で見れますし米国は進んでいます。」

イブラヒムはいつも見ている米国統計の先進性を説明した。

植木も、米国の統計が進んでいることは認めていた。そして、米国は世界の約四分の一を占める世界最大の石油消費国だし、世界中から資金の集まる米国市場が世界をリードするのは仕方の無いことかもしれないと思っていた。

一方、慎太郎は、スルタンから聞いたアシールの経済格差問題などを想い起していた。理由はともかく原油価格が上昇して、サウジアラビアの石油収入が増加すれば、低価格で経済が疲弊するよりも相対的にこの国は政治的にも安定するかもしれないなどと考えていた。

植木は、第九回国際石油・ガスフォーラムに出席するため翌一八日にはリヤドを出発した。

リヤドでは、五月二二日の夕方、サウジ国立銀行の前でドイツ人が砂漠のサソリにより射殺された。テロリストは、銀行の前に駐車していた車から機関銃でドイツ人の頭に一発、胸に四発弾丸を打ち込み走り去った。

ドイツはイラクに軍隊を派遣しているわけではなかったので、欧米人にとっては殆ど無差別テロに近い状態だった。

この事件でリヤドに滞在する欧米人の懸念がより一層高まった。

原油価格は相変わらず高かった。五月二四日には、四一・七二ドルとなり、またまた史上最高値を更新した。

イブラヒムは、更に原油価格が高くなったことでますます嬉しそうだった。そして、生憎、植木がいないのでその議論が出来ないことを残念がっていた。他方、慎太郎は、オランダのアムステルダムでは、原油高価格について大激論が行わ

れているのではないかと、植木のことを心配していた。

そのような中、五月二九日の土曜日早朝、サウジアラビアの東部、石油産業の中心地・アルコバールで砂漠のサソリによる銃乱射事件が起こり二二人の死者が出てしまった。

若い軍服を着た四人の若者が、アラブ投資会社の門の前に現れ、衛兵に従業員住宅の場所を聞いた。

二人の衛兵は、不審に思い侵入を阻止しようとしたが、その場で射殺されてしまった。その時、運悪く通学用のＧＭＣサバーバンが通りかかりテロリストの攻撃を受けた。

子供三人と運転手は逃げたが、一〇歳のエジプト人の子供が車の中に取り残されてしまった。この少年は、テロリストから投げ込まれた手榴弾により爆死した。

続いて、欧米系石油企業の入る石油センターが襲われ、米国人、フィリピン人、パキスタン人が射殺された。ここで国家警備隊と銃撃戦となり、警備隊はテロリストがセンター内に侵入するのは阻止出来たものの、テロリストが米国人の遺

体を車に括りつけ走り去るのを止めることは出来なかった。

「アラーフ・アフバル」

「ライラハ・イララ・モハンマド・ラスルーラ」

テロリストは米国人の遺体を引き摺りながら車の中で繰り返しそう叫んだ。

テロリストは、ダンマン・アルコバール高速道路を二キロメートルほど引き摺った後に、そこでようやく米国人の遺体を捨てた。

その後、テロリストは、オアシス・コンパウンドに侵入し人質を取って立て篭もった。

オアシス・コンパウンド内では、テロリストにより地獄の喚問が行われた。

彼等はコンパウンド内の住宅を一軒、一軒訪れイスラム教徒であるかないかを訊問した。そして、イスラム教徒には手を出さなかったが異教徒はその場で射殺した。

射殺された欧米人はイギリス人一人、スウェーデン人一人と少なく、インド人八人、サウジ人三人、フィリピン人三人、

スリランカ人二人、南アフリカ人一人と欧米以外の犠牲者が多かった。また、二五人が負傷した。

このニュースを聞いたイブラヒムは、多数のインド人が殺されたことに憤慨していた。

慎太郎は、南が心配だったので早速電話を入れてみた。

南のコンパウンドが襲われたわけでは無かったので大丈夫かとは思ったが続けて事件が発生しないとも限らない。南は幸い無事で慎太郎を心配させまいと空元気にしていた。

原油価格は、このサウジアラビアの石油都市で起こったコンパウンド襲撃事件を受け、週明けの六月一日には四二・三三ドルとなり、またまた史上最高値を更新してしまった。

六月二日の朝には、リヤド郊外で米国人の乗った車二台がテロリストの乗った車から銃撃された。

二台の車は、伴ってコンパウンドを出発したが、高速に入ったところで追ってきた車から狙撃された。一人の米国人は

軽傷を負ったものの、幸い二台の車は直ぐにコンパウンドに逃げ帰ることが出来た。リヤドでは五月二二日のドイツ人射殺事件に続く車からのテロ攻撃の発生によりテロに対する脅威が一段と高まった。

一方、治安当局の捜索によりタイフで二人のテロリストが射殺された。

慎太郎は、相変わらず、サウジの治安能力に高い信頼を寄せてはいたが、このようなテロの多様化、無差別化は心配の種だった。

冷静に分析すれば、テロリストの標的は米英及びイラクにおけるその同盟国であって、その他は標的攻撃に巻き込まれたか、英米人と見間違われて襲われたのだろうと考えられた。テロリストも無駄な攻撃はしたくない筈だ。しかし、世間一般の人はそのようには考えないでテロリストは無差別に攻撃するかもしれないと考えがちだ。

冷静に分析しなければならない筈の、このリヤドの住民の中にもいつどこで攻撃されるか分からないと不安を高めて

いるものが多かった。

慎太郎は、暫らく考えた末、将来の社長と嘱望されている石渡専務に何かあってはいけないと思って、再度、リヤド訪問を取り止めるよう進言することにした。

苦労の末に、やっとセットした会談を中止にするのは、慎太郎にとって忍び難い苦渋の決断だったが止むを得ないことだった。また、アリ石油相、スルタンにも申し訳ないが、アルコバールのコンパウンド襲撃事件、リヤドでの欧米人襲撃事件と続いて起きたので、アリ石油相、スルタンも了解してくれるだろうと思った。了解してくれなければ、それも致し方ない。

そう思って、慎太郎は三日の朝、意を決して東京に電話を入れた。日本との時差は六時間だから後一時間もすれば退社というタイミングだった。

「こんにちは、石渡の秘書の山岸でございます」

電話の向こうからはいつもの爽やかな声が聞こえた。周囲に日本女性のいないリヤドにいると心が和んだ。

「こんにちは。山岸さん、いつもお世話様。リヤドの池波です。こちらでは、まだおはようございますですけどね」
と慎太郎が言うと、商社の専務秘書らしい応えがあった。
「そうですか、リヤドと東京の時差は六時間でしたでしょうか。いかがですか。そちらは大分熱くなりましたか。治安が悪いようですから、くれぐれもお気を付け下さい。石渡専務ですね。今変わりますから、少々お待ちください」
遠くリヤドにいる慎太郎には、山岸のちょっとした気遣いが嬉しかった。しかし、これからの石渡との会話を考えると、また、気が重くなった。
「やあ、池波君、この間は有難う。アリ石油相との会談楽しみにしているよ」
開口一番、石渡はいつもの元気な声でそう言ってくれた。瞬時にして慎太郎の心は晴れた。一連の事件を伝えなければいけないと思っているうちに石渡は続けて喋った。
「ヤンブーに続いて、アルコバールでテロが起こり、それに、リヤドでもドイツ人が殺害されたりして大分治安は悪化したようだね。こちらでも君のことを心配していたが、元気そ

うなので安心したよ。まあ、君が欧米人と間違えられることはないとは思っていたがね」

最後は笑っていた。石渡は急激に悪化したサウジの治安状況を完全に把握した上での決断だった。何が起きても不思議ではない、このサウジに次期社長候補の石渡が来てくれる。慎太郎は、ただ、礼を言うのみだった。

慎太郎は、その後の石油省との調整具合を石渡に説明し、

「それでは、一〇日に空港でお会い出来ることを楽しみにお待ちしています」

と言って受話器を置いた。そして、その受話器に向かって手を合わせた。

その後、六月六日には、リヤド南部で、五月二九日に起きたアルコバール銃乱射事件を取材するためにサウジを訪れていたＢＢＣのカメラマンが射殺され記者が重傷を負うという事件が発生した。八日には、国家警備隊の訓練を請け負っていた米国人が自宅でテロリストに襲われ頭部に七発の弾丸を打ち込まれ惨殺された。この殺害の模様はテロリス

トによりビデオ撮影され、その映像がテロリストのウェッブサイトを通じて配信された。

今度は、慎太郎は、石渡には思い止まるよう電話をすることは控えた。テロリストの攻撃が欧米人に絞られていたし石渡の決意は固かったからだ。急に取り止める場合は、石渡から連絡があるものと思っていた。リヤド支店は、あらゆる危険性を考え、最善の体制を敷いた。

六月一〇日の夜、慎太郎は、感無量の面持ちでリヤド国際空港に立っていた。

石渡は、慎太郎が昨年一一月にリヤドに赴任した時と同じ便だった。

慎太郎には、機上から見た光景が昨日のことのように思い出された。そして、この半年以上に亘る労苦がようやく報われるのだと思うと自然に目頭が熱くなって来た。